

第 54 回ズーム三水会報告

日時：2026年1月21日（水）16時～18時

テーマ：人間社会の問題解決への道

「社会的連帯経済」への移行と「開かれた社会」への道

話者：野口幹夫氏

司会：岩垂弘氏

参加者（敬称略）丸山茂樹 中村範子 岩垂弘 波治裕実 野崎俊一 小関栄 富沢賢治

野口幹夫 計8名

会の内容：現代世界を襲っている様々な緊急的危機は資本主義グローバリズムと露骨な自国第主義のナショナリズムが起こしている。その解決法は資本主義から「社会的連帯経済」への移行と「閉ざされた社会」に生きる人類の次なる進化によって見えてくる「開かれた社会」への道である。特に今回は哲学者ベルグソンが提唱する「開かれた社会」が実現するのに必要とされる人類の次なる進化とは何かを検討した。

質疑討議：小関栄氏からこの報告の趣旨に賛成し、二宮尊徳の天道人道論にも通じる旨の見解が発表された。詳細は添付資料3のとおりである。

丸山氏は次回の三水会で社会的連帯経済社会の関するグローバルフォーラムについての報告をされる予定であるが、この二つの運動は連動しており、同時に進むとの見解を示された。またこの魂と宇宙意思の問題は宗教的であるとの指摘もあったが、報告者はかつては宗教の問題であったが、人類の進化に寄与するのは宗教としてではなく、科学的事実認識になるこ

とから生まれるとの趣旨が述べられた、

資料 発表レジメ 次ページ以下に添付

当日発表のパワーポイント資料：

事前配布のレジメ資料：

小関栄氏の討議資料：

録画資料： 誤操作のため録画できませんでした。

人間社会の問題解決への道

「社会的連帯経済」への移行と、
「開かれた社会」への道

三水会 2026年1月

野口幹夫

～目次～

- 1, 総論
- 2, 「開かれた社会」への道 総論
- 3, 「開かれた社会」論の誤解
- 4, 人間の次なる進化を阻止する象徴 無神論
- 5, 開かれた社会への道の実践 無神論の克服

1, 総論

今の社会的人間危機は、資本主義グローバリズム体制下で起きている**地球環境の破壊**と**資本による人間支配、貧富拡大**、そして先進国に起きている**移民排斥・自国第1主義の復活** 領土拡大のための**戦争の被害拡大**である。

この社会的人間危機の解決への道は、21世紀の現在、世界の実情からみて実際には簡単には実現できないが、さらに長期的展望に立てば、理論的哲学的には見えている。それを確認して将来の展望を持つことは重要なことである。

それを一言で表現すると次のようになる。

まず第1の経済社会的解決は、
「社会的連帯経済」体制への移行であり、

第2の人類の根幹に発する解決は、それを構成する人
類の次なる進化によって
「閉じた社会」から「開かれた社会」への発展である。

この両面が必要な理由は次のような事情である。

ある国で「社会的連帯経済」が実現したとしても、人類が今のままでは、その制度を実現した自国第一主義が発揮され、移民排斥や国内差別などさまざまな問題が起きる可能性は残っている。開かれた社会が実現していればそのような問題は起きない。

逆に開かれた社会が実現していても その社会が生きていくための経済体制の確立が必要で、それにふさわしいものは社会的連帯経済しかないのだ。

この二つの相合わさってはじめて人類社会は最終的な解決の姿になる。

この二つは違った次元の運動によって実現の姿が見えてくる。

まず「社会的連帯経済」体制への移行の道は、これまで三水会の皆様がさまざまな実践と理論の発展をしてくださっているのでそれにはふれない。

本論はベルグソンの示唆を発展させて「開かれた社会」への道を探求していきたい。

2, 「開かれた社会」への道 総論

ベルグソンは「道徳と宗教の二源泉」の中でこう説いた。

人間は「閉じた社会」からなかなか抜け出せない。「開かれた社会」への脱皮には「人間の次なる進化」が必要となる。

人間は今生物の進化のプロセスでは最高の地点に達し、知能を得、科学と技術を発展させて、地球を支配する段階に達したが、そこで停滞している。

今の段階では人類が持つ精神は、次のような段階で停滞している。自分の享楽へのエゴから抜け出せない。同類を仲間とし、仲間以外は疎外する。閉ざされた社会の中で安住する。肉体の死とともに、人生は終わるとみているものが多い。人類を含めた全宇宙の創造主である超越した存在は、必ずしも信じない。

次なる人間の進化は、このような精神的なものの上に起きるものであるとベルグソンは述べ、次のように説く。

人間が宇宙全体における自分の存在位置や価値についての本質に目覚める時に最後の進化がある。それがうまれたときに「開かれた社会」を作る「人類愛」を人類の精神にもたらす。

そのためには、人間は宇宙意思なる超越的存在に共鳴し、その死の先にある宇宙人生を理解し、その展望の元に、享楽とエゴにとらわれず、相互の人類愛の中で、明るい人生を生きることである。

その境地に達することは、停滞した状態にある人間では、自らの限界があり、その自発努力ではできない。どうすればできるのか。

それは人間を造った宇宙意思の最終的な目的であり、望みであったのだ。

その宇宙意思の目的を理解しその望みのメッセージを聴き受け入れ、それに沿うよう人類を導く指導者が必要なのだ。

それは1000年に一度といった稀な存在として人類の歴史の中であらわれたのだ。釈迦でありイエスである。

彼らはそれを人類に示そうとしたが、さまざまな抵抗に会い、全人類に波及することはなかった。

それに従わなかったのは、エゴを本能とする人間の不信の心である。

ベルグソンが予測するように、

精神科学・ダークマター科学が進んで「いのち」の本質、さらに特に人間の魂の存在、その肉体の死後に宇宙意思なる神の集団に飛躍参入する姿までを科学的に示せる段階になれば、全人類が宇宙意思の存在を理解できるようになり、人間には人類愛に基づく「開かれた社会」が到来する。

精神科学とダークマター科学が画期的な答えを出してくれ、次なる人類の進化を自発的にもたらせてくれる時代がくるには、あと100年か200年はかかりそうだ。

しかしまだその精神科学の飛躍の時期が見通せない現代、閉じた社会の破壊を少しでも食い止めるために、人間同士でできることは、釈迦やイエスが伝えてくれた超越的存在のメッセージを受け継ぎ、そのメッセージを聞き入れる人を少しでも増やしていく努力をしていくほかない。

3, 「開かれた社会」論の誤解

20世紀の前半「開かれた社会」論に、ある誤解が広まったことがあるので、脇道ではあるが、それを解いておきたい。

当時ロシアで社会主義革命が成功し、初めて共産党一党独裁の社会主義国家が誕生した。それは次々と世界に拡大していくことを目指した。

一方の資本主義国群はそれを阻止しようと防備した。いわゆる2極体制の冷戦状態に入った。

その時の理論的旗印のもとに「カール・ホパーの開かれた社会論」が持ち出された。

すなわち社会主義国家の一党独裁社会を「閉じた社会」とし自由主義経済の資本主義国家を「開かれた社会」としたのだ。

その背景のもとに投資家・慈善家ジョージ・ソロスの「開かれた社会財団」が活動し共産圏を離れる国家や集団を支援したことで、その名を世界的に広げた。「開かれた社会」をこのような反独裁といった狭い範囲の意義に理解している人が多くなっている。

ベルグソンが提唱した「開かれた社会」はもっと深い意味で、人類の次なる進化がなければはじまらないものだ。

4, 人間の次なる進化を阻止する象徴 無神論

ベルグソンのいう人類の次なる進化とは、精神すなわち魂の存在の本質的な理解の上で起きるものだ。

それは人間存在を肉体の終わりで終わりとせず、肉体の死の際に肉体とは別な物質からできている魂は肉体を離れて宇宙に飛翔し、宇宙意思なる神のもとに協力者として参加するという高度な存在で、そのような人類はすべて愛で結ばれる仲間だとすべての人類が兄妹同志だと理解する状況が到来した時である。

その理解を妨げるいくつもの要因が現存するがその、大きなものは今のおおくの人間が持っている無神論だ。その節では無神論の諸様相を見ていきたい。

4-1 積極的で強い無神論 ニーチェの「神は死んだ」

19世紀の実存主義的哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、有名な言葉「神は死んだ」を発し、強い積極的な無神論を展開した。

彼はプロシアでキリスト教プロテスタント教会の牧師の家庭で育ち、幼少の時から牧師になることを目指していた。青年期に達し、禁欲的で罪を犯さないことに厳格に生きるその境遇に反発を覚え、信仰を捨てる決心をする。科学技術の進歩、進化論の台頭といった知性主義の発展と、逆に宗教の担い手の墮落無力化という両面にはさまれ、信仰心を失っていくのはニーチェだけの個人的なできごとではなく、社会的現象であったのだ。

そして「神は死んだ」の言葉を発し無神論者としての人間の生き方を探索していく。

それまで道徳やすべての善悪の価値判断を神に頼っていたのをやめ、人間自身が判断することになるため、より強く、より知的な人間とならなければならないとし、その目指す人間像を「超人」と呼んだ。

また「永劫回帰」という意味深い言葉をのこしている。

「この世界のすべてが、同じ仕方で無限に繰り返される。もし今の人生を、まったく同じ仕方で永遠に繰り返さなければならないとしたら、あなたはそれを肯定できるか？」この人生の永遠回帰の試練に応じると答えられる人間が「超人」だというのが。

これに関して私見による解説を付け加えたい。

ニーチェのいう「永劫回帰」「人生の繰り返し」という言葉は常識をこえるが、仏教でいう「輪廻転生」という意味に取れば想像しやすい。

人によっては、死後魂は肉体を離れるが、超越的存在を否定しているので宇宙意思が待つ宇宙へは行かず、地上で新しく生まれたばかりの別人に乗り移って、生まれ変わり新たな人生を送るという現象のことだ。この不思議な現象にはいろいろな例がある。

チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマは、
自分自身の死後「生まれ変わり」をさがして後継者とする「輪廻転生」
制度を歴史的に継続している。

遠藤周作の小説「深い河」には「輪廻転生」が一つのテーマになって
いる、

主人公の男の妻はガンで亡くなるが、その死の間際自分は必ず「輪
廻転生」をするから探してといわれ、その姿を求めインドに旅立つ話だ。

それは人の死の時の在り方で左右される。生まれた子が前世の記憶
を持っているという不思議なことがあるのがそのことを証明するとされ
ている。

死後魂が肉体を離脱し、宇宙の超越的集団に参加するためには、それなりのエネルギーが必要である。

それはまず宇宙の超越的存在を信じ、死とともに、そのもとにはせ参じることがを願い、それを祈ることで生まれる。

仏教 浄土真宗では 死を迎える時、南無阿弥陀仏と唱えるだけでよいと教えている。キリスト教ではイエスが「私を信じるものはその終わりの時に永遠の命を与える」とのべている。

死の瞬間まで無神論者でいて、神の存在を受け入れなければ、魂の肉体からの離脱はできても地上で輪廻転生を繰り返すニーチェのいう「永劫回帰」となるがそれは一つの選択かもしれない。

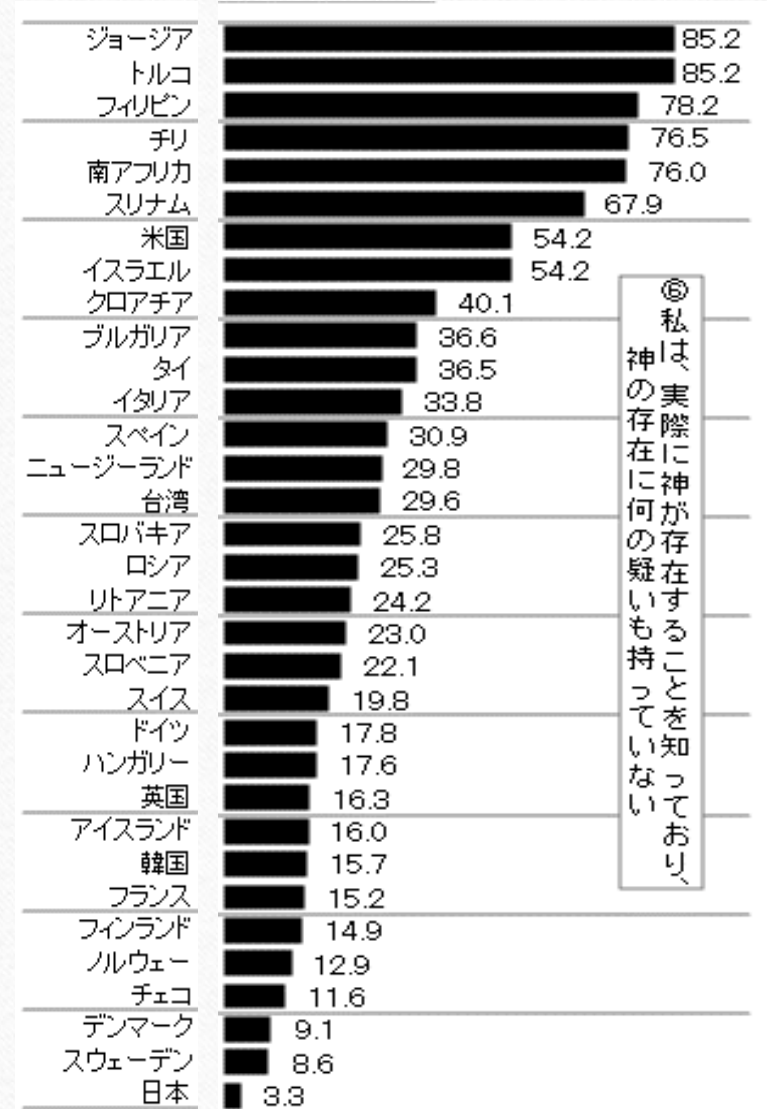
離脱できない魂が、肉体と共に焼却されてしまう選択もありニヒリズムには、それもまたスッキリして良しとみることであろう。

超人や永劫回帰の高度な論はともかくとして、現代の圧倒的多数の無神論はもっと消極、むしろ無意識な無神論だ。

4-2 消極的無神論

私がかつてはそうであったように日本人の典型的な無神論者は次のようなことから起きている。

- A 人間は元来無神論者 特別に周囲から注入されない限り神意識はない。
 - B 伝統神を受け入れ、素朴な神信仰習慣と、神話を架空の物語の一つとして受け入れ、逆に強い神意識を持たない
 - C 各種宗教団体を知り、その存在に反発し、神全般を否定する。
 - D 科学で証明されない存在は非存在とみなす。
- 等の理由でごく自然に無神論者になっている。ある調査では日本人の神意識のなさは世界でトップなのだ。



5 開かれた社会への道の実践 無神論の克服

5-1 無神論に生きる辛さを意識する

ニーチェの考えでは、無神論で生きていくためには、「超人」になる覚悟がいる。

また「今の人生を、まったく同じ仕方で永遠に繰り返さなければならぬ」「永劫回帰」いわゆる「輪廻転生」を繰り返し体験することになる。

無神論で生きることには、実はそのような辛い生に生きるのだということも無意識になかで過ごしているのだ。それに気付いてほしい。

5-2 宇宙意思の存在の科学的証明 無神論の消去

また宇宙意思すなわち神の存在を科学が認識し始めている現状を知ることが重要だ。

最近人工衛星ガイアの観測で判明したことがある。太陽移動説だ。

この銀河のなかで、我が太陽系は銀河の中心に近い位置で生まれ、超新星爆発が多くその破片をもらって、地球を含めた惑星を従えた太陽系となった。

その後不思議なことに、物理法則には添わない移動を長い時間をかけてして、中心に近い位置から遠ざかる移動をし、宇宙放射線の少ない安全ゾーンにとどまった。その結果、地球に生命を生み出し進化させ、結果的に我々人間存在を生み出したことが判明した。

人間が理解する物理的法則に従わないこの事実は特別な目的のために宇宙意思が成し遂げたこととしか理解できない。

また京大理学博士でNASA研究員をへて神奈川大学長をしておられる科学者桜井邦朋氏は

「なぜ宇宙は人類をつくったのか 最先端の現代物理学が解明した「宇宙の意思」の著作の中でこう語っておられる。

『この壮大な宇宙は クォークとレプトンからなる基本粒子と4つの力によって成り立っている。

この4つの力のバランスが少しでも違っていたら、今の宇宙はなく、人間も生まれなかった。

この構造があらゆる生命そして人間を必然的に生み出した。宇宙の成り立ちを理解しうる知的生命の存在を生み出すよう宇宙は生まれたといえる。

この宇宙の創造にあたって最初にしっかりとした目的があり、今日見るような姿を創出する「宇宙の意思」を感じる。

そのことを人間は知るべきだ。そして人間の不完全さが目に余るようになっている今こそ、自分の責任に思いをいたし、それを果たしてこそ、人は神に近づき神の代理人としての役割を果たすことができる。宇宙の意思を体現できるのだ。』

この他にも宇宙意思の元にある人間の観点の科学を進めた著者がいる。デイパック・チョプラとメナス・C・カファトスの共著「宇宙はすべてあなたに味方する」や、素粒子物理学者三田一郎「科学者はなぜ神を信じるのかーコペルニクスからホーキングまで」などなど上げきれない。

現代科学の盲点は

21世紀になってその存在が発見されたダークマターダークエネルギーにある。

これらは電氣的性質を持たないため、身近に圧倒的大量にあるにも関わらず、発見が遅れ、今だに現代科学では解明の糸口がない。

「いのち」とは何か 「魂の存在はどこにあるのか」などいまだ科学では答えのだせないこれら生命の神秘に関する科学の解明は、ダークマター・ダークエネルギーが認識できる手法が発見されてからの新しい科学の創出で解明される。22世紀のことになるろう。

5-3 精神科学の進展

一方ベルグソンは経験的な精神科学の進歩がキーになると期待した。

その分野では20世紀に大きな進展があった。

人間の死後肉体とは異なる物質でできている魂は、新しい活力を得て肉体を離れるが、それを研究する専門の研究所が1960年アメリカで生まれた。ロバート・モンロー研究所である。

生前の人間を対象に行った様々な研究の結果、ある条件を眠る人間につくれば、**生きたまま魂が肉体から自由に遊離させる**ことができることを実験で発見した。

それまで聞き取り調査の手法でその事実を統計的に確かめた「臨死体験」によって、人間の死後、肉体からの魂の離脱現象が起きることの証言が数多く得られていたので、それが実際のことと確信されたのであるが、
モンロー研究所の実験によって繰り返しの可能な科学実験として証明されたのだ。

これは人間存在の飛躍的理解につながり、次なる進化に直接寄与するものとなった。

5-4 神を信じる生き方の幸福

日本での多数派は素朴な無神論者として生きているが、それは無意識に苦勞の多い人生かもしれない。

ニーチェが説く超人への努力をし、また死後「輪廻転生」の苦勞を背負っているのだ。

神に立ち返れば、それらの苦勞を回避できるだけでなく、安心と幸福感を味わえる。

その歓びの境地を表現した芸術音楽がある、その二つを紹介したい。

一つは日本でも年末に必ず演奏される
ベートーベンの第九交響曲「歓喜の歌」である。
4つの楽章から成り立っているが、始めの3つの楽章で人生の様々な
楽しみを表現した後、それらをすべて否定して、新しく「歓喜の歌を共
に歌おう」と第4楽章が始まる。

#第九 ベートーヴェン/交響曲第9番『合唱付き』第4楽章 #タクティオ
ケ #オーケストラ #合唱 #ベートーヴェン #orchestra #beethoven

「天からの使が告げる。この星々のかなたには一人の愛する父がおられる。その暖かな翼の元にすべての人類は兄弟となるのだ。」と歌う。

宇宙におられる愛する父の存在のありがたさとそのもとにある人類の幸せを歌う名曲である。

しかしそのような筋書を持った曲と理解せずに、あの美しいメロディと勇壮な曲想に酔いしれて歌い、聴いている人が多いかもしれない。

もう一つは、アメリカの第2国歌ともいわれる「アメージング・グレイス」である。かつては神をも恐れず、罪深かった自分が神に立ち返り、祈ったことから、救ってくれた神の恵みをたたえる幸せな気持ちを素直に表現した歌だ。

作詞したジョン・ニュートンは若い頃は水夫として荒れた生活を送り、奴隷貿易船で暮らしていた。ある時、激しい嵐にあって船が沈みかけ、死を覚悟したとき、はじめて真剣に神に祈り、それがきっかけで心が変わり始めた。そして奴隷貿易をやめ、キリスト教に深く帰依して牧師となった。そしてその懺悔と感謝の思いを詩にした。

後にアメリカで黒人霊歌の伝統の中の無名の作曲家が、あのすばらしいメロディをつけたのが、「アメージング・グレイス」なのだ。

【三宅由佳莉】「アメイジング・グレイス」海上自衛隊 東京音楽隊『水曜コンサート』 ◆続きは <https://youtu.be/94dSjX7LlsQ>

これらの音楽が表現しているごとく神の存在とその意思を素直に受け入れる瞬間に訪れる喜びは、歓喜の叫びをあげるほどのものであり、その道に進むのに何の困難もない。

いつでも神は、どんな人でも、神に立ち戻ってくる魂を、喜びをもって無条件で受け入れてくれるからだ。

5-5 結び

宇宙意思なる超越的存在は、巨大すぎて、人間にははばかりがたく理解を超える存在である。

ベルグソンが指摘するように、人間には超越した存在へのあこがれの心は仕組まれてるようで、それを求めてきた。

だから人間は様々な わかりやすい象徴を当てはめて崇拝してきた。天照大神 ヤーウエ アッラー キリスト 阿弥陀仏 大日如来 などなど。

今やどの宗教集団に属する必要もない。次の信条をもつことだ。
(むろん特定の宗教集団に属すればその信条は常に鍛えられることにはなるが。)

「やがて人間は、その肉体の死を迎える時、無限の超越的存在を受け入れ、信じて、そのもとに参加すると決心するならば、その魂は宇宙に飛翔し、新しいいのちが始まる。」

自分がそのような人間であると確信できれば、ベルグソンが言う、精神上的「次の進化」を成し遂げたことになり、人類愛を抱き「開かれた社会」への推進参画者となったことになる。

終わり

人間社会の問題解決への道

「社会的連帯経済」への移行と、「開かれた社会」への道

三水会 2026年1月

野口幹夫

～目次～

- 1, 総論
- 2, 「開かれた社会」への道 総論
- 3, 「開かれた社会」論の誤解
- 4, 人間の次なる進化を阻止する象徴 無神論
- 5, 開かれた社会への道の実践 無神論の克服

1, 総論

今人間社会は重大な危機にさらされている。トランプ大統領が支配する世界は単にアメリカ国内に「アメリカ第1主義」をアピールしただけではなく、国際法を無視して、意に沿わぬ隣国ベネズエラの大統領を逮捕するという暴挙を犯してまで、「アメリカ第1主義」を実行した。アメリカ国内でも移民を排斥し、さらに国家資本の進出で元来市場の自由に任せる資本主義グローバリズムすら国家資本主義体制に組み換えようとしている。地球環境破壊の現状も作り話だと無視し、利潤の増出のためには石炭の増産復活をさせている。

アメリカばかりでない。イスラエルのパレスチナ ガザ住民のジェノサイド、ロシアの領土拡大のためのウクライナ侵攻、これらの末期的悲劇の同時進行が地球を襲っている。人間社会はここから立ち直れるのだろうか。

まずはトランプやネタニアフ プーチンといった人間個人の政権からの退場が当面の正常化へのきっかけとなるだろうが、それには彼らを取り巻く人間集団、国民の覚醒化が課題である。やはり個人の暴挙を許している集団としての人間の問題なのである。

この報告は現代地球を脅かしているこれらの諸問題に直接関係できる答えでは

ない。もっと長期的な展望でしかないが、ここで述べたように、今の危機も所詮人間のあり方の問題なのであるから、やはり一つの答えではあると思う。

この社会的人間危機の解決への道は、21世紀の現在、世界の実情からみて実際には簡単には実現できないが、さらに長期的展望に立てば、理論的哲学的には見えている。それを確認して将来の展望を明確に持つことは重要なことである。それを一言で表現すると次のようになる。

まず第1の経済社会的解決は、資本が人間を支配する国家資本主義体制から脱却し「社会的連帯経済」体制へ移行することであり、第2の人類の根幹に発する解決は、それを構成する人類の次なる進化によって「閉じた社会」から「開かれた社会」への発展させることである。

この二つの両面が必要な理由は次のような事情である。

ある国で「社会的連帯経済」が実現したとしても、人類が今のままでは、その制度を実現した自国第一主義が発揮され、移民排斥や国内差別などさまざまな問

題が起きる可能性は残っている。開かれた社会が実現していればそのような問題は起きない。

逆に開かれた社会が実現していても その社会が生きていくための経済体制の確立が必要で、それにふさわしいものは社会的連帯経済しかないのだ。

この二つの相合わさってはじめて人類社会は最終的な解決の姿になる。

この二つは違った次元の運動によって実現の姿が見えてくる。

まず「社会的連帯経済」体制への移行の道は、これまで三水会の皆様がさまざまの実践と理論の発展をしてくださっているのでそれに期待したい。

本論はベルグソンの示唆を発展させて「開かれた社会」への道を探求していきたい。

2, 「開かれた社会」への道 総論

ベルグソンは「道徳と宗教の二源泉」の中でこう説いた。

人間種は。それが生まれた時から家族や仲間達だけで生きる「閉じた社会」に安住し、そこからなかなか抜け出せない特質を持っている。「開かれた社会」への脱皮に

は今のままの人間種ではダメで「人間の次なる進化」が必要となる。

人間は今生物の進化のプロセスでは最高の地点に達し、知能を得、科学と技術を発展させて、地球を支配する段階に達したが、そこで停滞している。

今の段階では人類が持つ精神は、次のような段階で停滞している。自分の享楽へのエゴから抜け出せない。同類を仲間とし、仲間以外は疎外する。閉ざされた社会の中で安住する。肉体の死とともに、人生は終わるとみているものが多い。人類を含めた全宇宙の創造主である超越した存在は、必ずしも信じない。

次なる人間の進化は、このような精神的なものの上に起きるものであるとベルグソンは述べ、次のように説く。

人間が宇宙全体における自分の存在位置や価値についての本質に目覚める時に最後の進化がある。それが生まれたときに「開かれた社会」を作る「人類愛」を人類の精神にもたらす。

そのためには、人間は宇宙意思なる超越的存在に共鳴し、その死の先にある宇宙人生を理解し、その展望の元に、享楽とエゴにとらわれず、相互の人類愛の中で、明るい人生を生きることである。

その境地に達することは、停滞した状態にある人間では、自らの限界があり、その

自発努力ではできない。どうすればできるのか。

まずそれは人間を造った宇宙意思の最終的な目的であり、望みであったのだが、その宇宙意思の目的を理解しその望みのメッセージを聴き受け入れ、それに沿うよう人類を導く指導者が必要なのだ。

それは1000年に一度といった稀な存在として人類の歴史の中であらわれたのだ。釈迦でありイエスである。

彼らはそれを人類に示そうとしたが、さまざまな抵抗に会い、全人類に波及することとはなかった。それに従わなかったのは、エゴを本能とし、人間の不信の心である。

ベルグソンも予測するように、精神科学・ダークマターを読み取れる科学が進んで

「いのち」の本質、さらに特に人間の魂の存在、その肉体の死後に宇宙意思なる神の集団に飛躍参入する姿までを科学的に示せる段階になれば、全人類が宇宙意思の存在を理解できるようになり、人間には人類愛に基づく「開かれた社会」が到来する。

精神科学とダークマター科学が画期的な答えを出してくれ、次なる人類の進化を自発的にもたらせてくれる時代がくるには、あと100年か200年はかかりそうだ。

しかしまだその精神科学の飛躍の時期が見通せない現代、閉じた社会の破壊を少し

でも食い止めるために、人間同士でできることは、釈迦やイエスが伝えてくれた超越的存在のメッセージを受け継ぎ、そのメッセージを聞き入れる人を少しでも増やしていく努力をしていくほかない。

3、「開かれた社会」論の誤解

20世紀の前半「開かれた社会」論に、ある誤解が広まったことがあるので、脇道ではあるが、それを解いておきたい。

当時ロシアで社会主義革命が成功し、初めて共産党一党独裁の社会主義国家が誕生した。それは次々と世界に拡大していくことを目指した。

一方の資本主義国群はそれを阻止しようと防備した。いわゆる2極体制の冷戦状態に入った。

その時の理論的旗印のもとに「カール・ホパーの開かれた社会論」が持ち出された。

すなわち社会主義国家の一党独裁社会を「閉じた社会」とし自由主義経済の資本主義国家を「開かれた社会」としたのだ。

その背景のもとに投資家・慈善家ジョージ・ソロスの「開かれた社会財団」が活動し共産圏を離れる国家や集団を支援したことで、その名を世界的に広げた。「開かれ

た社会」をこのような反独裁といった狭い範囲の意義に理解している人が多くなっている。ベルグソンが提唱した「開かれた社会」はもっと深い意味で、人類の次なる進化がなければはじまらないものだ。

4、 人間の次なる進化を阻止する象徴 無神論

ベルグソンのいう人類の次なる進化とは、精神すなわち魂の存在の本質的な理解の上で起きるものだ。それは人間存在を肉体の終わりで終わりとせず、肉体の死の際に肉体とは別な物質からできている魂は肉体を離れて宇宙に飛翔し、宇宙意思なる神のもとに協力者として参加するという高度な存在で、そのような人類はすべて愛で結ばれる仲間だとすべての人類が兄妹同志だと理解する状況が到来した時である。その理解を妨げるいくつかの要因が現存するがその、大きなものは今のおおくの人間が持っている無神論だ。その節では無神論の諸様相を見ていきたい。

4-1 積極的で強い無神論 ニーチェの「神は死んだ」

19世紀の実存主義的哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、有名な言葉「神は死んだ」を発し、強い積極的な無神論を展開した。

彼はプロシアでキリスト教プロテスタント教会の牧師の家庭で育ち、幼少の時から

牧師になることを目指していた。青年期に達し、禁欲的で罪を犯さないことに厳格に生きるその境遇に反発を覚え、信仰を捨てる決心をする。科学技術の進歩、進化論の台頭といった知性主義の発展と、逆に宗教の担い手の墮落無力化という両面にはさまれ、信仰心を失っていくのはニーチェだけの個人的なできごとではなく、社会的現象であったのだ。

そして「神は死んだ」の言葉を発し無神論者としての人間の生き方を探索していく。それまで道徳やすべての善悪の価値判断を神に頼っていたのをやめ、人間自身が判断することになるため、より強く、より知的な人間とならなければならないとし、その目指す人間像を「超人」と呼んだ。

また「永劫回帰」という意味深い言葉をのこしている。

「この世界のすべてが、同じ仕方で無限に繰り返される。もし今の人生を、まったく同じ仕方で永遠に繰り返さなければならないとしたら、あなたはそれを肯定できるか？」この人生の永遠回帰の試練に応じると答えられる人間が「超人」だということだ。

これに関して私見による解説を付け加えたい。

ニーチェのいう「永劫回帰」「人生の繰り返し」という言葉は常識をこえるが、仏教でいう「輪廻転生」という意味に取れば想像しやすい。

人によっては、死後魂は肉体を離れるが、超越的存在を否定しているので宇宙意思が待つ宇宙へは行かず、地上で新しく生まれたばかりの別人に移り移って、生まれ変わり新たな人生を送るといふ現象のことだ。この不思議な現象にはいろいろな例がある。

チベット仏教の最高指導者であるダライ・ラマは、自分自身の死後「生まれ変わり」をさがして後継者とする「輪廻転生」制度を歴史的に継続している。

遠藤周作の小説「深い河」には「輪廻転生」が一つのテーマになっている、主人公の妻はガンで亡くなるが、その死の間際自分は必ず「輪廻転生」をするから探してといわれ、その姿を求めインドに旅立つ話だ。

それは人の死の時の在り方で左右される。生まれた子が前世の記憶を持っているという不思議なことがあるのがそのことを証明するとされている。

死後魂が肉体を離脱し、宇宙の超越的集団に参加するためには、それなりのエネルギーが必要である。それはまず宇宙の超越的存在を信じ、死とともに、そのもとに

はせ参じることを願い、それを祈ることで生まれる。

仏教 浄土真宗では 死を迎える時、南無阿弥陀仏と唱えるだけでよいと教えている。キリスト教ではイエスが「私を信じるものはその終わりの時に永遠の命を与える」とのべている。

死の瞬間まで無神論者でいて、神の存在を受け入れなければ、魂の肉体からの離脱はできても地上で輪廻転生を繰り返すニーチェのいう「永劫回帰」となるが、それは一つの選択かもしれない。

さらに肉体から離脱できない魂が、肉体と共に焼却されてしまう選択もあり、ニヒリズムには一回きりの人生、それもまたスッキリして良しとみることであろう。

超人や永劫回帰の高度な論はともかくとして、現代の圧倒的多数の無神論はもっと消極、むしろ無意識な無神論だ。

4-2 消極的無神論

私も、かつてはそうであったように日本人の典型的な無神論者は次のようなことから起きている。

A 人間は元来無神論者 特別

に周囲から注入されない限り神意識はない。

B 伝統神を受け入れ、素朴な神

信仰習慣と、神話を架空の物語

の一つとして受け入れ、逆に強

い神意識を持たない

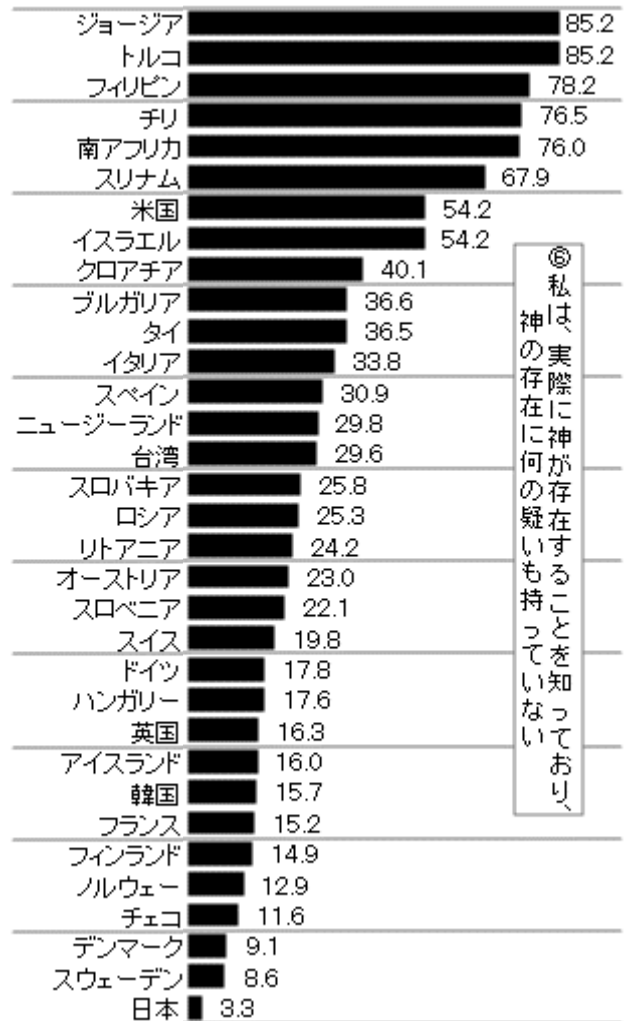
C 各種宗教団体を知り、その存

在に反発し、神全般を否定する。

D 科学で証明されない存在は非

存在とみなす。

等の理由でごく自然に無神論者になっている。ある調査では日本人の神意識のなさは世界でトップなのだ。左のグラフを見てください。



5 開かれた社会への道の実践 無神論の克服

5-1 無神論に生きる辛さを意識する

ニーチェの考えでは、無神論で生きていくためには、「超人」になる覚悟がいる。

また「今の人生を、まったく同じ仕方で永遠に繰り返さなければならない」「永劫回帰」いわゆる「輪廻転生」を繰り返し体験することになる。

無神論で生きることには、実はそのような厳しい生に生きるのだということも無意識になかで過ごしているのだ。それに気付いてほしい。

5-2 宇宙意思の存在の科学的証明 無神論の消去

また宇宙意思 すなわち神の存在を 科学が認識し始めている現状を知ることが重要だ。

最近人工衛星ガイアの観測で判明したことがある。太陽移動説だ。この銀河のなかで、我が太陽系は銀河の中心に近い位置で生まれ、超新星爆発が多くその破片をもらって、地球を含めた惑星を従えた太陽系となった。その後不思議なことに、物理法則には添わない移動を長い時間をかけてして、中心に近い位置から遠ざかる移動をし、宇宙放射線の少ない安全ゾーンに入り、そこにとどまった。その結

果、地球に生命を生み出し進化させ、結果的に我々人間存在を生み出したことが判明した。人間が理解する物理的法則に従わないこの事実は、特別な目的のために宇宙意思が成し遂げたこととしか理解できない。

また京大理学博士でNASA 研究員をへて神奈川大学長をしておられる科学者桜井邦朋氏は「なぜ宇宙は人類をつくったのか 最先端の現代物理学が解明した「宇宙の意思」の著作の中でこう語っておられる。

『この壮大な宇宙は クォークとレプトンからなる基本粒子と 4 つの力によって成り立っている。この 4 つの力のバランスが少しでも違っていたら、今の宇宙はなく、人間も生まれなかった。この構造があらゆる生命そして人間を必然的に生み出した。宇宙の成り立ちを理解しうる知的生命の存在を生み出すよう宇宙は生まれたといえる。

この宇宙の創造にあたって最初にしっかりとした目的があり、今日見るような姿を創出する「宇宙の意思」を感じる。

そのことを人間は知るべきだ。そして人間の不完全さが目に余るようになってい
る今こそ、自分の責任に思いをいたし、それを果たしてこそ、人は神に近づき神の代理人としての役割を果たすことができる。宇宙の意思を体現できるのだ。』と

この他にも宇宙意思の元にある人間の観点の科学を進めた著者がいる。デイパック・チョプラとメナス・C・カファトスの共著「宇宙はすべてあなたに味方する」や、素粒子物理学者三田一郎「科学者はなぜ神を信じるのかーコペルニクスからホーキングまで」などなど上げきれない。

現代科学が手の届かない分野は21世紀になってその存在が発見されたダークマター・ダークエネルギーにある。これらは電氣的性質を持たないため、身近に圧倒的大量にあるにも関わらず、発見が遅れ、今だに現代科学では解明の糸口がない。「いのち」とは何か 「魂の存在はどこにあるのか」などいまだ科学では答えのだせないこれら生命の神秘に関する科学の解明は、ダークマター・ダークエネルギーが読める手法が発見されてからの新しい科学の創出で解明される。22世紀のことになろう。

5-3 精神科学の進展

一方ベルグソンは経験的な精神科学の進歩がキーになると期待した。その分野では20世紀に大きな進展があった。人間の死後肉体とは異なる物質でできている魂は、新しい活力を得て肉体を離れるが、それを研究する専門の研究所が1960年アメリカで生まれた。ロバート・モンロー研究所である。生前の人間を対象

に行った様々な研究の結果、ある条件を眠る人間につくれば、生きたまま魂が肉体から自由に遊離させることができることを実験で発見した。

それまでは、聞き取り調査の手法でその事実を統計的に確かめた「臨死体験」によって、人間の死後、肉体からの魂の離脱現象が起きることの証言が数多く得られていたが、それが、モンロー研究所の実験によって繰り返しの可能な科学実験として証明されたのだ。これは人間存在の飛躍的理解につながり、次なる進化に直接寄与するものとなった。

5-4 神を信じる生き方の幸福

日本での多数派は素朴な無神論者として生きているが、それは無意識に苦勞の多い人生かもしれない。ニーチェが説く超人への努力をし、また死後「輪廻転生」の苦勞を背負っているのだ。神に立ち返れば、それらの苦勞を回避できるだけでなく、安心と幸福感を味わえる。

その歓びの境地を表現した芸術音楽がある、その二つを紹介したい。

一つは日本でも年末に必ず演奏されるベートーベンの第九交響曲「歓喜の歌」である。4つの楽章から成り立っているが、始めの3つの楽章で人生の様々な楽しみを表現した後、それらの楽しみ方をすべて否定して、新しく「歓喜の歌を共に歌おう」

と第4楽章が始まる。

そして「天からの使が告げる。この星々のかなたには一人の愛する父がおられる。その暖かな翼の元にすべての人類は兄弟となるのだ。」と歌う。宇宙に存在する愛する父の存在のありがたさと、そのもとにある人類の幸せを歌う名曲である。

しかしそのような筋書を持った曲と理解せずに、あの美しいメロディと勇壮な曲想に酔いしれて歌い、聴いている人が多いかもしれない。

もう一つは、アメリカの第2国歌ともいわれる「アメージング・グレイス」である。

かつては神をも恐れず、罪深かった自分が神に立ち返り、祈ったことから、救ってくれた神の恵みをたたえる幸せな気持ちを素直に表現した歌だ。

作詞したジョン・ニュートンは若い頃は水夫として荒れた生活を送り、奴隷貿易船で暮らしていた。ある時、激しい嵐にあって船が沈みかけ、死を覚悟したとき、はじめて真剣に神に祈り、それがきっかけで心が変わり始めた。そして奴隷貿易をやめ、キリスト教に深く帰依して牧師となった。そしてその懺悔と感謝の思いを詩にした。

後にアメリカで黒人霊歌の伝統の中の無名の作曲家が、あのすばらしいメロデ

イをつけたのが、「アメージング・グレイス」なのだ。

これらの音楽が表現しているごとく神の存在とその意思を素直に受け入れる瞬間に訪れる喜びは、歓喜の叫びをあげるほどのものであり、その道に進むのに何の困難もない。いつでも神は、どんな人でも、神に立ち戻ってくる魂を、喜びをもって無条件で受け入れてくれるからだ。

5-5 結び

宇宙意思なる超越的存在は、巨大すぎて、人間には はかりがたく理解を超える存在である。だから人間は様々なわかりやすい象徴を当てはめて崇拜してきた。天照大神 ヤーウエ、アッラー キリスト 阿弥陀仏 大日如来などなど、

今やどの宗教集団に属する必要もない。次の信条をもつことだ。(むろん特定の宗教集団に属すればその信条は常に鍛えられることにはなるが。)

「やがて人間は、その肉体の死を迎える時、無限の超越的存在を受け入れ、信じて、そのもとに参加すると決心するならば、その魂は宇宙に飛翔し、新しいいのちが始まる。」

自分がそのような人間であると確信できれば、ベルグソンが言う、精神上的「次の進化」を成し遂げたことになり、人類愛を抱き「開かれた社会」への推進参画者となったことになる。

終わり

全人類に開かれた道を求めて

小関 栄

一、 国際情勢が理不尽なことがとみに増して諸変化して来ている。それは強力な指導者が率いる強権国家が増して民主主義国が少なくなっているからだ。

ロシアの対ウクライナ戦は既に満三年になるのに攻撃の手をやめないし、休戦調停に入ったアメリカが、侵略国ロシアが占領したウクライナ領の割譲を迫って終戦に臨んだが、ウクライナが承知せずに収まる見込みがない。

アメリカは、民主主義国の代表で実質的に長く世界の覇権を握って来たが、トランプ大統領になって、米国第一のスローガンにより強力な関税政策を実施して世界一の富を得ようと厳しい政策を展開して来ている。

また、アメリカはイスラエルの対パレスチナ領ガザ地区攻撃の手加減を迫ったり、イランの国内暴動の反政府デモを支援したり、また、南米の主権国家エクアドル大統領を法の支配を超えて逮捕したり、コロンビア政府に圧力をかけ支配下にしようと試みるなど。さらにはグリーンランドの米国領有を目指す動きなどの強権ぶりを発揮し世界の輿論を買っている。

一方では、中国は国内問題として中国統一を図るとして、台湾に強大な軍事力で威圧を掛け、中国共産党独裁政治への統合を試みている。

いずれにしても、経済力、軍事力では世界の最強の三か国（米、露、中の 3G）が、法による秩序を無視し、力による領土の拡大を目指し世界制覇を握ろうとしている。既に、従来の世界平和のための国際連合や G7 や G20 は軽視されてきている。

二、 このような世界の風潮を立て直す統べは、もう一度、国際的な話し合いを行う余地は少なくなっているが、時間をかけて、3G 以外の次なる強国、つまりインド、カナダ、ドイツ、フランス、イギリス、ブラジルなどが、勿論日本も参加して国連の立て直しに臨むしかなかなかろう。極めて難しい方法だが、時間をかけて粘り強く話し合い続けるべきだ。争いの当事国を含めては解決のめどは立たない。

三、 国や民族間の争いに、共通の意識の共有化は極めて至難であろうが、現状の法秩序の維持には、一国だけでなく、少なくともそれを乱す国を除いて、取り巻く国々が結束して推進する以外には手がない。調停上に宗教の力も、すでに何度も経験済だ。要はお互い究極は両損になることを認め合うことだが、この争いの当事者だけでは中々認められないのが過去の例だ。

- 四、 社会的連帯経済の体制を世界に広めていく方法も確かに有力な手法だ。国々が独立しての利益だけでなく、全人類が連帯した開かれた社会は、そのための犠牲も共同利益のための手段として推進することで、全く同感である。勿論、これは最初、隣国同士で、これを進め、次第に連合する機関として国連が一働きする強力な機関を設け、全方位に拡大化することである。即ち、全世界すべてが社会的連帯経済に移行してゆけば、開かれた社会を実現すること出来るのである。世界が平和で、共通に繁栄して行けるのである。ムベなるかなである。
- 五、 なお、開かれた社会の実践には無神論では不可とは。全宇宙について、殆どの人間にとっては現在の科学の力ではダークマターだ。此処、宇宙に人間にとっては解らない偉大な力——エトワス、神の存在があることは、殆どの人が認めるところだろう。これはベルグソンの云う通りである。宇宙に人間を超える偉大な力が、此処に神が存在するからと認識することであり、人間は、その存在の有無は論ずるよりも神のみ知ると信ずることが先ず必要だ。宇宙の真理は未だに殆ど大部分の人間の認識外であるからだ。
- 宇宙は人類の発生かなり以前から存在している。この未知の分野に存在するエネルギーは神の力だ。これは信ずるは宇宙の力の存在を認めることである。
- 六、 このことは江戸時代の農民の二宮尊徳も、全く同じような考えを示している。尊徳によれば、この世の始まりは、太極が開關して天地が分かれてからであり、人類が生まれたのはずっと後のことである。（尊徳著”三才報徳金毛録”より）
- 七、 この天地が開關して、その考えにより天道・地道・人道の原理により、そのあるべき道が推移してきているのであると説く。即ち、天地道は天理自然の道であり、尊徳は神道を全面的に信じ、神道を全面的に信じて自然の力を神の力とした。それに対し、人道は「私欲に勝つ作為である」と教えた。「天理は万古変せず、人道は勤めるを以て貴しとする、己に克つの教えなり」（尊徳翁夜話より）と教えている。
- 八、 ここに進めるべく、社会的連帯経済への移行にも社会的共通利益のために尽すべき自己の欲望を減して共益に尽くすのが人道であると教えているのである。自己の利益だけ考える人々によく聞かせたいところである。
- 一国だけでなく、関連する数か国、さらには拡大して全人類へも共通利益のため、そのための参加国の義務を納得し、その履行の認識も肝要である。

以 上